開会　令和２年２月１２日
閉会　令和２年２月１２日

足利市総合教育会議

足利市教育委員会

令和元年度第２回足利市総合教育会議会議録

１　開催日時　　令和２年２月１２日（水）
　　開会　午前１０時００分　閉会　午前１１時２０分

２　開催の場所　足利市役所４階　特別会議室

３　出席者

市　　長　　和泉　　聡
教 育 長　　若井　祐平
教育委員　　笠原　健一
教育委員　　市橋　雅子
教育委員　　菊地　義典
教育委員　　照本　夏子

４　会議出席した事務局職員

総務部長
行政管理課長
教育次長
教育総務課長
市立図書館長
教育総務課庶務担当総括主幹
教育総務課庶務担当副主幹

足利市小中学校 PTA 連合会会長　　舘野　進一
うちどく推進委員会　　桑山　弘和
教育センター　　佐藤　進一

５　傍聴者　１名

６　会議日程

日程第１　議題　（１）家庭における読書活動の推進について
　　～「家読」による推進～

７　議事の経過

○　開会

○　和泉市長あいさつ

皆さんおはようございます。本日は、令和元年度第２回の総合教育会議にお集まりいただきましてありがとうございます。

先日、教育委員会の方で足利学校のあるまちにふさわしい、目指すべき子ども像、そのためにも求められる学校像を教育理念として定めたところです。より良い教育環境をつくるための具体的な条件整備について、教育関係部署のみでなく、市長部局を含めた全体で検討を進めていきたいと思っております。

さて、本日は、家庭における読書活動、いわゆるうちどくの推進について、小中学校ＰＴＡ連合会の舘野様をはじめうちどく推進委員会の桑山様にお越しいただきまして、これまでの取り組みについて報告をいただきます。

私は毎年楽しみな応募作品を読ませてもらっておりますが、子どもとご両親・ご家族が本を通じて普段なかなか語り合えないようなことをやり取りしている姿に大変意味というものが伝わってきて、取り組みの成果が少しずついろんなところで皆さんが関係者として手ごたえを感じているのではないかなと思っております。

そういう現状を受けて、今後家庭における読書をどのように広めていったらよいかという視点、また、一方では、現在の小中学生の学力向上に向けた取り組みも検討しているところですので、読書という切り口から接点というかそういうものも皆さんとの議論の中で探していければと思っております。限られた時間ではありますが、どうぞよろしくお願いいたします。

○　若井教育長あいさつ

それでは、一言挨拶を申し上げます。昨年の暮れだと思いますが、日本の子どもたちの読解力が低下してきているというような内容が報道がされましたが、これは経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）で行っている調査ですが、１５歳というので高校１年生あたりでしょうか。参加国７９か国が参加して３年に１回調査をした結果が報告されていました。調査内容は、大きく３つくらいに分かれていまして、一つは数学的リテラシー、二つ目は科学的リテラシー、三つ目が読解力となっています。この調査の中で日本はレベルが高い方ですが、その中で読解力が過去に比べて、だんだん低下してきているということでありました。新聞等あるいはある学者は、その原因は子供たちのスマートフォン、ＳＮＳなどの普及で子どもたちが読むこと書くことあるいはコミュニケーションや短い文章でのやりとり、これで長い文章に触れる機会が少なくなったという背景があるのではないかという声も出ています。学校の

方でも国語科を中心に言語活動を充実することで、いろいろな広報をしながらやっているところですけれども、読解力と読書の関係は、私は深いものがあると思っています。学校だけでなくて、家庭での読書活動は大いに賛成です。子どもたちに成長を支える読書というのは非常に大きな役割を果たしていると思いますし、また、読書を通して親子の触れ合い期、これもまた大事なものになると思います。足Ｐ連あるいはうちどく推進委員会で今取り組んでいいただいていることに、私は大いに賛成でございます。感謝しているところでございます。舘野会長さん、桑山委員長さん本日はお仕事のお忙しい中ご出席くださいましてありがとうございます。本日はよろしくお願いいたします。

○　議題

市立図書館長
足利市子ども読書活動推進計画について説明

市長
皆さんから質疑・論点等、今の説明について何かございますか。

笠原委員
全国学力・学習状況調査のアンケート調査の基礎算定が平成３０年に比べて令和元年が全国的に低下しているのは何か傾向的な理由がありますか。

市立図書館長
先ほどの教育長のあいさつの中でおっしゃっていましたが、スマホとかゲームなどの普及によりまして、その都度短い文章のやり取りで済ませている中で読解力が低下しており、読書に親しむという機会が失われていると考えております。

市長
スマホは今更、今年だけの話ではないので、何か心当たりがありますか。今日は、学校教育課長は来ていないか。学校サイドでは、分析はあるのでしょうか。みんな下がっているということは、何か理由があるんだろうね。きっと。

教育次長
おそらくスマホが考えられますが。それだけではないと思いますが。

市長

スマホは今年だけの話ではなく、ここ 4 年・5 年の話になると思う。確かに一斉に下がっているというのは、きっと何か理由があるんだろうね。今でなくていいので分かるようでしたら後で教えて下さい。他はいかがでしょうか。

市橋委員

質問というか、今けっこう図書館が熱い、熱いという言い方は変なのですが、例えば去年、ドキュメンタリー映画でニューヨークの公立図書館「エクス・リブリス」という映画がありました。これを見たいと思ったら上映している劇場が限られていて東京でないと見られない状況でした。これは世の中では反響がありまして、世界にこんな図書館があるのか、これからの図書館をイメージするというか、単なる本を貸出しするだけでなく、地域住民に対して就職活動とか、いろいろ幅広く支援するので、みんな図書館に集まってきます。これからの図書館の未来像みたいに感じました。私は実際に見ていないので、解説等の印象ではすごい映画だなと、今世界が注目しており、さすがアメリカという感じがしました。そのようなことも、今後、長い目で見ていく必要があるんだろうなと思っています。

もうひとつは、昨日の下野新聞に公共図書館の将来を考えるという勉強会が宇都宮であったということで、これを調べてみましたら、去年２０１９年の６月に公共図書館の将来の答申が出てました。全国的に、そのようなことで市民生活をサポートする図書館へというサブテーマみたいのがあったりして、地域住民の生活全体をサポートする図書館というあたりが今後出てくるのかなという気がしました。足利の図書館に関わる人も勉強されていると思いますが、今まで単に本を貸すという機能だけでなく、今後、多方面に運営を考えていく必要があると思いました。

教育次長

私もこの映画は見たことがあります。とにかく長い映画でニューヨークにある図書館のドキュメンタリー映画でした。アメリカの場合は格差などもあり、来てしまうホームレスさんなど全部引き受けている部分もあります。日本とは若干違いますが、図書館が人のたまり場みたいになっていて、そこで次のステップ、自立するまでつなげていくというのがすごいなと思いました。日本の場合も今、道の駅などでは自動車で生活をしている人が増えているみたいですけど、そういうところで次のステップにさせていくのがこの映画のすごいところでした。

市長
　葉鹿小学校の写真について説明をお願いいします。

教育総務課長
　学校との調整ができなく、先生・ボランティアの方がお見えになれなかったのですが、この当時のお話を聞いてみました。そこにありますように平成 29 年度の文部大臣表彰を受けておりまして、市長のところへは表敬訪問されていますので、ご記憶は新しいと思いますが、そこにありますように前の状態と今の状態が記載してあります。そして地域の図書館ボランティアの方にお願いしてそこにありますように明るい感じの色に変えてあります。そのような取り組みを２年続けて行いました。要するに地域の力を借りた中で配置を変えたり、子どもたちが手に取りやすく低くするなど非常に工夫をされています。変わった当初は子どもたちが列を作って図書室に行くとか、そんな話でした。それから何年か経ち、その当時のボランティアの方の入れ替えはありましたが、今でも２０人弱の方がボランティアに携わっており、子どもたちにも学校でどこが一番好きかと聞いたところ、多くの子どもたちが「図書室が好き」という答えがあると先生が言っておりました。そんな形ですので改修後も利用はやはり多いのだろう、そんなお話をされていました。

市長
　この予算について、市が予算的な手当てをした部分とボランティアの方が手当てした部分を教えて下さい。

教育総務課長
　ほとんどボランティアです。それで、色々な図書室のあり方というか、本の分類の仕方などいろんな考えがありますが、児童文学評論家の赤木かん子さんという方が、今の東山小の村山校長先生とつながりがありまして、年に何回か来ていただきいろんな指導をしてもらった中で変えてきた経過もあるようです。ただ、分類の仕方というのが、基本的にはそれに沿っているのですが、要するに子どもたちが取りやすいような工夫をされているものですから、それが一概に全て合うかどうかは別ですが、ただ、狙いとすると子どもたちがすぐに本を取れる環境、明るくて快適で、そういうのを狙いとしてやっています。地元の人もやってくれたということで、一つの事例としてはいいかなと思っております。

市長
　私も何回か見せていただきましたが、ほんとに激変というか、子どもたちが描く図書館に変わっていく様子が手に取るようにわかりました。葉鹿小の例は結構モデルケースというか先行事例ですか。教育長どうですか。

教育長
　そうですね。葉鹿小以外も図書室を改造して子どもたちが関心を持つ。そういうところが最近増えてきています。これは本当にありがたいなと思います。地域の皆さんのそういった方々の支援をいただいているということは大きいことです。

市長
　続いて小中学校ＰＴＡ連合会並びにうちどく推進委員会の代表の皆さんからこれまでの取り組みについてご報告をいただいて、皆さんと情報を共有していきたいと思います。よろしくお願いいたします。

桑山うちどく推進委員会委員長
　うちどく推進委員会の桑山です。本日は貴重な時間をいただきありがとうございます。私は平成２５年度から３年間足Ｐ連の会長を務めまして、この事業の立ち上げから携わって来ましたので、私の方からこの経緯と趣旨を説明させていただきまして、後ほど舘野会長から現在取り組んでいる研究ＰＴＡの状況についてご説明させていただきます。まず、「うちどく」とは、ご承知のとおり家庭での読書活動のことをいいます。ただ単に家族と一緒に読書をするというのではなく、本を読んで感想を話したり、あるいはお勧めの本を教えたり、そういった家族のコミュニケーションを図るというのもうちどくの一つであります。また、我々は、この事業を始めるにあたって少しでも親しみやすいように、漢字表記ではなくてひらがなで「うちどく」という標記にさせていただいております。では、その「うちどく」を足Ｐ連が始めることになった経緯ですが、約７年ぐらい前ですね、平成２４年度の役員会で足Ｐ連のスケールメリット、パワーを生かした活動はできないものかという議論がなされました。当時の足Ｐ連の主な事業といいますと、要望書の取りまとめや教育懇談会の開催、そして年２回の会長研修会の開催といった一般のＰＴＡ会員の皆さんにはなかなか分かりづらい内容のものでした。なので、もっと市内全体のＰＴＡ会員が取り組める、そして、足利のＰＴＡはこういうものに力を入れているのだ、というのが一目で分かるような活動をすべきではないかというような話になりました。そこで何か足利らしい運動をしようということになりまして、足利といえば古代より全国から多くの学生が足利学校に集いたくさんの本を読んで学ん

でいったという歴史があって、先程からお話がでていましたが、ちょうどこの前年ぐらいから、毛野南小さんをはじめ市内の小中学校も学校図書館の改造の動きが始まりまして、市内全体で読書への機運が高まってきたという背景もあったので、漠然と子どもの読書量の全国一位を目指そうという話しになりました。ただ具体的に何をやったらいいのかわからない状況のまま、翌年の平成２５年度をスタートしたのですが、そんな時に私が県教委主催の「うちどくフォーラム」に参加して、三郷市教育委員会さんの「読書で育む家族の絆」という講演会を聞きました。初めて「うちどく」の目的や手法というものを知って大変感銘を受けました。「読書で家族の絆を育む」というのは正にＰＴＡの出番だと、ＰＴＡの役割ではないかと思いまして、Ｐ連内のコンセンサスを得てさっそく１１月の教育懇談会に吉田さんを教育委員会の方がお招きしてご講演をいただいて、ご出席をいただいた教育関係者の方々に足Ｐ連として今後「うちどく」に取り組んでいくと方向性を示しました。その翌年の総会では、正式に「うちどく」が事業として承認され、秋には第１回「うちどくコメントコンクール」を開催しました。これは「うちどく」を広く知らしめて気軽に取り組めるような、きっかけになるような仕掛けがないかと考えたときに三郷市さんで「うちどく郵便コンクール」というものを行っていまして、そこからインスパイアされまして、より簡略化されましたコメントという形で、コンクールを企画しました。それは添付資料にありますが、こういった催しで、左側に子どもたちが本を読んだ紹介コメントを書いて、右側に子どもと同じ本を読んだ家族のコメントあるいは、本を読む時間がない場合は子どものコメントを見てその感想コメントを右側に書くというような取り組みであります。おかげさまで関係各位のご協力のもと毎年応募件数が増えまして、現在は市内小中学生の半数を超えるご応募をいただいております。また、家族の絆を感じさせる素晴らしい作品が年々集まってきております。こうして何とかスタートしたのですが、なかなか順調には進まないで、平成２８年度ごろから足Ｐ連内で予算を確保するのが非常に難しくなってきました。ということで第３回目の「うちどくコメントコンクール」は市の市民活動支援補助金を申請して、ご承認いただいてそれで開催いたしました。また、この年は、年度末に先程館長からご報告がありました足利市子ども読書活動推進計画において「うちどく」という方針が掲げられてコメントコンクールの応募数が評価項目の一つに掲げられました。平成29 年度には実行委員会形式である足利うちどく推進委員会に報告をして、市立図書館さん、他の団体さんとの共同を促進する形にしまして、協賛金を募ってコメントコンクールの開催費用等に充てるような仕組みづくりをしました。また、市教委作成の足利版「家庭学習の手引き」学びのすすめに「うちどく」をしましょうという文言を入れていただきました。そして昨年度より「うちどく推進」をテーマに栃木県 PTA 連合会の２年間の研究 PTA 事業を委嘱され、そ

の一環として昨年は「うちどく意識調査アンケート」第１回目を実施しました。こちらは後ほど舘野会長より詳しい説明があると思います。そして今年度は、研究 PTA の仕上げの年ということで「うちどく」の具体的なやり方を示した「うちどくの進め」という「うちどくのマニュアル」を作りまして具体的なやり方を示しました。夏休み前に全小中学生の家庭にお配りしました。また、あまり本や読書に興味のない子どもや保護者に少しでも興味を持っていただくため、「足 P 連うちどくフォーラム 2019」というのちょうど「市立図書館まつり」と同じ日に相乗効果を狙いまして開催いたしました。こちらにチラシがありますが、劇場版名探偵コナンの脚本でも有名なミステリー作家の大倉崇裕をお招きしての講演会やトークショー、パネルディスカッションを行いました。また、第２回目のアンケートも先月実施しまして、現在、各校の PTA で集計中です。研究 PTA で現在まとめに取り掛かっているところです。最後にこの事業の趣旨というものを改めて説明をさせていただきます。一つ目は学力の向上。二つ目は豊かな人間性、豊かな心を育むこと。三つ目は家庭教育力の向上であります。学力向上と豊かな人間性の育成については、読書そのものの目的でもありますので、ここでは割愛させていただきます。三つ目の家庭教育力の向上についてですが、家族で本に親しみコミュニケーションを図ることで、家族の絆が深められる、家庭での生活習慣を見直すことができることにもつながるということであります。この三つ目の目的こそ足 P 連が「うちどく」に取り組む意義があると思っております。近年学校では、先ほどお話がありました朝読書や読み聞かせなどで、子どもの読書の習慣化や意欲を高める活動を盛んに行われている一方で、家庭ではなかなか本を読む習慣ができていないのが現状です。子どもの読書習慣は学校だけでなくて、家庭での日常生活を通して作られるものでありますので、保護者が積極的に働きかけていくことが必要だと考えます。また、子どもの最も身近な存在として、保護者が子どもと共に読書の楽しさを分かち合って、読書に親しむような活動を提案していくことが、足 P 連の役割ではないかと考えています。特に先程らいお話がありました、今、子どもたちが家庭でスマホやゲームに長時間携わっていることが社会問題になっておりますが、「うちどく」を進めることで、「うちどく」の時間を設けることで、そのような生活習慣自体を見直すことにもつながると思っております。そういう意味でも、保護者の代表であり集合体である足 P 連が積極的に「うちどく」を推進していくことが、大変大きな意義があると思っております。私の説明は以上です。

舘野足利市小中学校ＰＴＡ連合会会長

小中学校ＰＴＡ連合会会長の舘野でございます。本日はこのような貴重なお時間を設けていただきまして、また、日頃より当会へのご協力をいただきまし

て、本当にありがとうございます。続きまして私の方から、研究ＰＴＡ事業の説明をさせていただきます。この研究ＰＴＡというものは、栃木県ＰＴＡ連合会が実施しているものでありまして、平成３０年度、３１年度の２年間、研究事業を我々足利市で、足利市小中学校ＰＴＡ連合会で仰せつかっております。この研究ＰＴＡですけれども、題材として何にしようというところで、みんなで協議した結果、足Ｐ連として推進している「うちどく」に関して実施していこうということで、うちどく推進委員会の桑山委員長を筆頭にご協力をいただいております。この研究計画ですけれどもお手元の資料にもありますが、そこから若干抜粋をしてご説明をさせていただきます。では、この研究ＰＴＡというものを足利市小中学校ＰＴＡ連合会でやっているというのを、教育懇談それから年 2 回の会長研修会等をとおしまして、各ＰＴＡ会長ほか役員の方々に周知を図っております。また、本年度の７月に「うちどくのすすめ」というものを作成させていただきまして、皆様のお手元の資料にも入っていると思いますが、「うちどく」をさらに広めていくためのひとつのきっかけとして、「うちどく」の目的ですとか、やり方ですとか、こんなことから始めてみようという、ちょっとこう内容的にはだいぶ簡略化されたものではありますけれども、難しいことを書くよりも、簡単な取り組みやすいということで、そういったものを目指して作成させていただきました。それから今年度で６回目となりますが、「うちどくコメントコンクール」を毎年開催させていただいております。桑山委員長からもありましたように、始めたときは少なかった応募が、今は各校長先生の協力もあり本当に増えてきているなと実感しております。それから足利市立図書館の図書館祭りと共同で開催をさせていただいておりますが、その中でコメントコンクールの表彰式ですとかビブリオバトルの運営をさせていただきまして、こちらも本に関わっているということで、本の魅力を伝えていただいたり、そういった事業のひとつとしてやらせていただいております。それから先ほど説明がありましたが、「うちどくフォーラム」というものを今年度も開催させていただきました。この「うちどくフォーラム」は、市内小中学校の保護者に幅広く声をかけさせていただきまして、また、チラシも配布させていただきまして、より多くの本に興味を持っている方から、ちょっと聞いてみたいなという方に向けてフォーラムを開催させていただいて、さらに意識の向上と取り組みということで実施をさせていただきました。また、昨年９月に実施したものと今年度１月に実施したものとして、この「うちどく」に関するアンケートを今実施している真っ最中であります。ほぼ集計段階に入っているのですが、これから全体集計をしましてフィードバックをしたいなと考えています。それからそちらの資料にはたくさんいろいろ書いてありましたが、そのような状況で資料を参照していただければと思います。「うちどく」の認識ということで、「うちどく」という言葉を知っているという、だいぶ浸透してきたとい

うこともあり、「うちどく」とい言葉は知っているということをアンケートからも確認ができるのですが、その目的というところで、先ほど説明にもありましたが、その三つの目的ということで、その目的をもっともっと皆に知っていただきたいなというところで、それを様々な活動を通して周知をしていきたいなと考えております。「うちどく」をしたことがあるという回答は７割弱ですけれども、「うちどく」をして一緒に本を読んだり、本の感想を伝えあったり、それから家族で本を薦め合ったりとか、そういったことが実際のところまだまだできていないのかなというところで、その「うちどく」をしない理由としましては、忙しくてする時間がないですとか、子どもは部活・習い事、それから宿題等で取り組む時間がない、もしくはやり方が分からないなどの様々な意見があります。そういったところを今後改善していくための策を我々として何か講じていければなと考えています。「うちどく」の効果としまして、先ほどの説明にもありましたけれども、子どもとのコミュニケーションというものを図ったりとか、教育長の話にもありましたけれども、読解力、これも私も感じていることでありまして、ＳＮＳ等で書いている文章を見ますと非常に端的なんですね。短い文章で「分かった」とかで１行で終わってしまう文章が多いので、文章を組み立てるという力が不足している気がしますし、また、それを読んでこの人が何を伝えたいのかというのを読み解く力が本当に低下しているのではないかなと私も感じておりますので、そういったところも本を通して、それから様々な人とのコミュニケーションを通してもっともっと向上させていきたいなと考えております。余談になってしまいますが、私、栃木県ＰＴＡ連合会の副会長を今年度仰せ使っておりまして、そちらの兼ね合いからも、栃木県子ども読書推進委員会の会議に出席させていただきまして、そちらでも不読率という表現をしているのですが、子どもの読書する量が小学校から中学校へ、中学校から高校へ行くとどんどん減っているという、そんな調査結果もありまして、県の方は高校生の不読率の改善と言っているのですが、小中学生においても不読率をもっともっと改善していきたいというところで、子どもの読書冊数というところで、お手元の資料にありましけれども、栃木県では小学校５年生で７％の不読率ですが足利市は 17.5%ということで少し県に比べて多く、中学２年生を見ても同様に 10%程度の差がありますので、小中学生共に約 10%程度の差がある結果がでております。もっともっと我々が中心になって、それから学校の校長先生をはじめ図書館の担当の先生とか担任の先生等々、共同でやっていかなくてはいけないと思いますが、こういったところをもっともっと改善していけるような取り組みもしていけたらなと考えております。今後の活動としまして、「うちどくコメントコンクール」は毎年の事業ですので、これをもっともっと周知して子どもの参加率を高めていきたいと思っています。また、「うちどく通信」は年２回発行させていただいておりまして、こちらは本の魅

力を発したり、読書の推進につながるような内容としてもっともっと充実させていきたいと考えております。「うちどく」を推進する一つとして、環境整備ということで先ほども話題にもあがりましたが、図書館街道ですとか、ほんとに市内にそういったことを積極的に実施している学校がいま増えてきまして、それを足利学校図書館良くしたいとか読書推進プロジェクトと連携してそういったものを推進していければさらに良くなるのではないかと思っております。また、ビブリオバトルは聞きなれないかもしれませんが、ビブリオバトルの出張講座なども次年度以降実施していければと「うちどく推進委員会」として考えており企画を今しております。こういったことも更に子どもたちの読書活動推進につながっていけばと考えています。様々の皆様方のお力添えが無ければ成り立たないということで、我々もそんなふうに考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

市長

ありがとうございました。教育委員の皆さんに発言をお願いしたいのですが、その前に、基本的なことを私からいくつか簡単にご質問いたします。応募数がこの資料の１ページにある、スタートが平成 26 年度の 369 から平成 27 年度の 2，318 とこの数字が応募数ですか。平成 29 年度の 6,230 をピークに少し子どもの数が減っていますが、少し頭打ち感はありますか。

足利市小中学校ＰＴＡ連合会長

学校別の応募数を見てみますと、例えば昨年度 100％に近いぐらいの応募数のあった学校が次の年にガーンと応募数が下がってしまった学校もありまして、やはり我々の周知もそうですが、学校側の協力というのが一番重要なポイントなのかなと思います。校長会等でもお伝えをしておりますが、そういったところで、各校長先生をはじめ先生方の取り組みの差というものも影響しているかなと考えています。

市長

2 点目ですが、「うちどくコメントコンクール」のコメントをいつも読ませてもらい感心しています。本は何の本を選ぶかはまったく自由ですか。

足利市小中学校ＰＴＡ連合会長

漫画を除き自由です。

市長

では、図書館長の報告と今の「うちどく」の報告、その他含めて、ご意見、

ご感想、ご質問等ありましたらご発言をお願いいたします。照本委員さんからお願いいたします。

照本委員

今回の会議の前に、自分自身が本を読む意味というか、何で本を読むのだろうということを考えてみました。調べ物とかをする時には、やはりインターネットで調べることを今はできますが、出典を明らかにして確度の高い情報を得るということでは、インターネットよりも確度が高いということもありますし、あとは小説を読む時にも、自分のその時の状況によって同じものでも見方や学ぶところが変わるところ、解釈が制限されない所がすごく自由でいいなと思って私は本を読むのだなとその時に感じました。同じ本でも本当に読む都度目にとまるものが違ったり、得るものというものが違うと思います。先ほどからお話があったように、楽しむためのツールですとか調べるためのツールというのが沢山ある中で、だけれども読書も自分のためになるいいものなんだということが子どもたちに伝わらないと、なかなか同じ他の楽しいものの中で本を読んでもらうのは、ちょっと難しいことなのかなと感じています。そうしたところで、今回の「うちどく」の推進というところは、本を読むきっかけを与えてくれて、しかも自分が何かわからなくて困っている時とか悩んでいる時に、何か本を読むときに自分よりの解釈になりますが、本から何か語り掛けてくれることがあるんだなということを知るきっかけになることがとてもいいことだと思いますし、大人で話をする時に、何の本を読んでるかという話が出ると、相手がこういう本を読んでいると、その人というのはその本を読む考え方とかそういう思考を持った人なんだなということで相手の人柄が少しわかるというところがあると思うので、やはり親子間でも本当のところ相手のことが確かに分かっているかというとそうではないという部分が非常にあると思うんですね。ですので、子どもが読んでる本、自分が読んでる本、それぞれのいいところとか、そういった感想を述べあうことで相手が考えていることを分かるという意味でもすごく「うちどく」の試みというのはいいものだと思いました。今回いただいた「うちどく推進の取り組み」という資料の中で子どもの「うちどく」習慣が日常の生活を通して形成されるという一文があるのですが、その中で自分の高校の時を思い出したのですが、私の家は母が県立図書館に毎週土曜日の午後に私たちを連れていくという家でした。私の弟は小学校２・３年生になるまでずっとアンパンマンしか借りなかったんですね。親がもっと年齢に適したいいものがあるといってもアンパンマンしか借りないんですね。ところが３年生の途中で歴史に興味を持つようになったんですね。ＮＨＫの大河ドラマだったと思いますが、そこからやはり本を読むという環境があるので、どこでその情報を仕入れたらいいのか、まず本になったんですね。そこからアンパンマンだっ

たのが急に歴史書に読むものが代わりまして、小学校の高学年になると図書館とか近くの本屋さんでは本を手に入れることができなくなって専門書などを取り寄せるようになったんすね。ですので、そういうことから考えても自分が何か興味を持った時に本を読むという環境があることはとても重要なことなんだなとこの資料の中からちょっと思い出して申し上げました。もうひとつですが、読書というときに、書の中におそらくマンガが外されているのではないかなと思います。「うちどく通信」の中の「うちどく」のアンケートの裏側の問４－３の下に漫画しか読まないということが書かれていたりとか、問５のその他のところに何が入っていたかというと、タブレットなどの電子書籍とか漫画も薦めるとか、そこから２行下に行くと、素直な感想で面白いなと思ったのですが、読書しない子＝スマホ・ゲームばかりしているバカな子という先入観を強く感じる、これなんか率直な意見でスマホ・ゲームばかりというのは意見として面白いだけですけれど、漫画も今、日本の文化になっていますし、やはり本は規制がないと思いますので、本を全く読まない子にとってはいきなり文字が沢山ある本よりは、ハードルが少し下がって、きっかけづくりのひとつになる部分もあると思います。私自身も漫画本を読みますし、本も読みますけど、漫画の中からすごく感銘を受けて、そこからまた一般の書籍を読んでいくということもありますので、もし読書の書の中に漫画が入っていないのであれば、そこに漫画も含めるというか、本を読むという中に含めると、またちょっと本を読む子どもが増えてくるのではないかなと考えています。

市長

最後の手は私も議論としてあっていいなと思っています。本当の漫画ではだめですが、実は私も市長になってから、カラマーゾフの兄弟という本を全部読んだのですが、最初漫画で出ているので、漫画で大体のストーリーを読んでから読んだりしたのですが、そういう漫画もあるということで、桑山さん、舘野さんたちは漫画についてそういう議論をしたことは全くないですか。それともありますか。

舘野足利市小中学校ＰＴＡ連合会長

漫画については、市長や照本委員がおっしゃるように我々も思っている部分はありますが、こういったコンクールを開くにあたって、それを許してしまうと、そこから漫画だけに広がっていってしまう可能性もあるので、コンクールに関してはそうなんですが、確かに読書推進という、読書を広める部分では、もちろん漫画から取り掛かって進めていくという部分もあってもいいかなと思っています。

市長
　図書館長、市立図書館は漫画に関してどうですか。

図書館長
　基本的には、漫画の所蔵というのは限定しておりまして、歴史ものとか戦時中の出来事を描いた漫画は一部所蔵しております。

市長
　その辺は、検討とか議論とかはこれまでありましたか。一度議論してみたら面白いかもしれませんね。

教育次長
　今この近隣で一番使われている図書館は、邑楽町の図書館ですね。そこは漫画を置いてるんですね。利用率が圧倒的に高いというのも含めて、今後議論していきます。

市長
　議論してみる価値はありますね。それでは菊地委員からお願いします。

菊地委員
　ちょうど私がけやき小学校でＰＴＡ会長を受けていた時に、桑山さんが、Ｐ連の会長で「うちどく」を推進している、そういうタイミングにシンクロをしていまして、「うちどく」という言葉を聞いたのもこのＰ連の活動の中で桑山さんが使っていたのを初めて聞いたとういう経緯がございます。そういったお話を受けてＰＴＡの方で「うちどくの進め」という文書を書かせていただいたく取り組みをさせていただきました。一番最初の時は、漫画でもいいという話があったので、長男がコリスという漫画を読んでいたので、私も読もうと思ってなかったのですが、「うちどく」だからということで、子どもの読んでいる漫画を読んでみたり、娘が読んでいる本を一緒に読んだ、そんな思い出があります。漫画に関して言うと、「うちどく」に関してですが、私が小学校の時に読んでいた漫画を私の親父は読んでないので、「うちどく」という言葉をもらって、子どもが読んでいる漫画を読んでみて、なんかそこで同じ漫画でも同じことでお話ができたということは、非常に良かったかなと思っています。あとは、娘が読んでいた小学生向けの女の子っぽい本でしたけれども「うちどく｝をしようと思わなければ、決して手にするような本ではなかったし、内容も子ども向けですけれども、非常にいい内容が書いてあるんですね。子ども向けの本も非常に素晴らしいなと実感として感じました。そういった取り組みが、や

っぱり桑山委員長は非常に熱い男なので、ずーっとやり続け、ここまでやって本当に改めまして心から敬意を表するところです。こういったキーワードでいいきっかけをいただけたのかなというのが、今でも私としては感謝をしているところです。

あとは、学校の図書館の取り組みで言うと、各校に熱心なボランティア活動をする保護者の皆さんがいらっしゃいまして、小学校もそうでしたが、本が好きな保護者というのが各校にいらっしゃると思います。そういうところもポテンシャルを発揮するとこういった大臣表彰をいただけるような活動にまでなるのかなと感じますし、こういったところは、各校の情報を交換しながら、さらに足利市全体として学校の図書館をブラッシュアップするような、そういった活動につなげていけるような、そういうポテンシャルは十分あると思うので、さらに、学校図書館に磨きをかけて「うちどく」を推進していくということは、地道な活動ですけれども、確実に足利の教育力を上げる活動につながると思いますので、ぜひ、足Ｐ連と市の方で連携をしてこういった活動をこれから増やしていく必要があると感じております。

市長

笠原委員お願いします。

笠原委員

まずこの「うちどく」の推進ですね。本当にＰ連さんや推進委員会さんの取り組みは素晴らしいと思います。これも足利のある種、誇りとするものになっていると思います。本当にボランティアの方を含めてこれをぜひとも続けていって欲しいなと思いますし、私も教育委員の一人として、これはしっかりともっともっと根付くようになることをうまくお手伝いできればいいなと思っております。私の事だけを申し上げますと、私は高校時代まで本を読まなかったんですね。ブルダックスのような科学系の本だけは読むのですが他は、あまり読んでいなくて、大学に入ってから読むようになったのですが、むしろ子どものころに、小中高時代に読んでおけばよかったなとつくづく大学行ったり、あるいは社会人になって思ってたり、もちろん今は今なりに読むことはなるべく努めてやっておりますが、子どもの時代に自分は読んでおけばよかったなと微かな効果、そういったことを含めて「うちどく」の取り組みの推進というのは、本当にすごいことだなと、何が何でもこれからも力強く進めていって欲しいなと思います。私は本というのは、自分の好みだけ言うと、実は宮城谷昌光さんの本が好きなんですが、本当に文字がすごいんですね、漢字が、こうひとつひとつ文字の意味を、例えば聞くというのを引くといろんな漢字がいっぱいあって、その漢字を的確に宮城谷昌光さんは書くんですね。漢字で聞くと聞いても

いくつかは書けますけど、そんな漢字もあるのか、こんな漢字もあるのかそれがどういう意味なんだと、ほんとに文字の強さ、文字のすごさが、もしかすると本でしか伝えられないかもしれない。話が飛びますが、足利も映像のまちということでやっていますが、映画で見る作品と原作があって原作本を読んだ時のイメージというのは、もちろん映画の場合は２時間、２時間少々で納め切らなくてはならないという限定されているものがありますが、原作を読んだときとイメージというのはずいぶん違ったりするんですよね。そういう意味では奥行きとか膨らみというのは原作の強さというのはすごくありますし、目でいきなり見る映画と頭の中で膨らませて、その色とか形を自分で作っているような本というのは、やっぱり違うものであって、まあどっちもどっちで素晴らしい文化であると思いますが、やっぱり自分でいろんな想像をしたり膨らませたりするということを文字を通してやれるということは、やっぱり読書というのはすごいことだと思いますし、子どものできるだけ小さいうちに、それに接して当たり前のように、本を読む習慣があって、私もなかなかそうも書けないので書いてないのですが、できれば足利市民の趣味の欄に読書と書く人が一人でも多くなるといいと思いますし、そういったことの一番の前提になるものは「うちどく」だったりするかなと思います。是非ともこれは私も応援したいと思いますし、しっかり続けていただくようお願いしたいと思います。

市長

ありがとうございました。それでは市橋委員にお願いします。

市橋委員

読書について、本についてなんですが、私は教育現場にいるときから本当に強く思っていることは、本は宝の山だと、本当に宝物だなと思っていました。そして子どもたちには、本を読み聞かせする時、本当に砂に水が入るように、子どもたちの中に話が入っていくのが分かります。そういうのを体感しますと、やっぱり本の素晴らしさというのは、言い尽くすことはできないという感じがします。そういう点で、足Ｐ連の方で平成２４年度から取り組んでいるこの「うちどく」というのを今年で７年目、コメントコンクールも６回でとても歴史を重ねていっています。内容的にも大変素晴らしい取り組み、単に本を子どもたちに読む機会を与えるということだけでなく、先ほど家庭教育力の向上という点で、このアンケートを見ますと「うちどく」をして一番よかったことは子どもとのコミュニケーションが増えたという、これが 45.9%もいらっしゃると、このことは今家庭の教育力が叫ばれている中で果たす役割はとても大きく、Ｐ連でやっていただくことは、皆さん親ですから広まっていくのにとてもいいし、本当に良い取り組みだなと思います。これを足利の伝統として、行政の方

の後押で支援していけたらいいなと思います。足利には「うちどく」というのが常識、足利の市民はみんな「うちどく」を知っている、というふうになれたら本当にいいなと思っています。子どもにとっても読書、大人にとっても読書ですが、脳科学的に見ると、本で読みましたところ、脳科学者によると、脳の発達に読書習慣がどのような影響を与えるかというのをＭＲＩという装置で３年間調べたそうです。そうしたら読書習慣が有るか無いかということが子どもの脳の発達に大きく影響しているということが分かったそうです。つまり本を読む子どもを育てることが、子どもたちの将来を守ることにつながって行くことを考えると、本当に「うちどく」の果たす役割は大きいと思います。では「うちどく」をしていくのに、有効な方法というか、その中でも一番はモデリングだそうで、モデリングというのは大人（親）が読書をする姿を子どもに見せ、そこで大人が家庭で読書や活字に親しんでいる姿を直接子どもに見せることが最も有効だといわれています。そういう事を考えますと、この「うちどく」というのは本当に素晴らしい方法であると実感いたします。それをずっと続けてきた足Ｐ連の桑山さんをはじめ皆さんに本当に感謝したいと思います。

市長

ありがとうございました。それでは教育長からお願いします。

教育長

私は子どもが何故本を読まないのだろう。その根っこの部分、何故本を読まないのかなというところを今回テーマに挙げて考えてみたのですが、ゲームや漫画には言われなくても自分から取り組むのに、なんで本を読まないのだろう。字を読むのが面倒などいろんな理由があると思いますが、今日いただいた資料のアンケートの中にも「うちどく」をしない理由ということで、忙しくてする時間がないという理由が挙げてありますが、一番これだなというのは私と同じですが、そもそも子どもが本に興味がない、そういう回答が多いという。ではどうすれば子供に本の興味・関心を高めることができるのか、私はここが根っこかなと思います。そのために皆さんにいろいろなあの手この手で取り組んでおられるし、学校も取り組んでいます。そこで私は、すべてに通じるかどうかわかりませんが、二つ具体的な事例をあげますと、さかなクンというよくテレビに出る東京海洋大学の客員教授であります。あの方が小さい時に自分が持っている自由帳に友達がいたずら書きをした。それを見て、腹を立てるのではなくて、落書きを見てこんな素晴らしい生き物がいるんだということに気が付いたんですね。ウルトラマンと戦っている大ダコの絵だったんですね。タコが墨を出して戦っている。そのタコが素晴らしいと、すぐに休み時間に図書館に行って図鑑で調べたり、それだけでも足りなくて、学校帰りに魚屋さんに行って

実際にタコを見て吸盤の数も数えたり、それを見ていたお母さんがその子はタコにずいぶん関心があるということで、１か月間夕飯にタコ料理ばかりを食べさせたそうです。それでもまだその子はタコ、タコとタコのことばかり言っているので、水族館に連れていって本物のタコを見せてやって、泳いでいる姿とか、そのうちにさかなクンはタコから他の魚まで関心を持っていろいろと書物を見始めて今の姿があるだというエピソードがあります。それともう一つの事例ですが、これはアルプスの少女ハイジというのがありますが、それを私がずーっと前に読んだ時、こんな場面がありました。ハイジがアルプスから離れてクララという女の子の家庭で一緒に生活をすることになった。その時にクララの家に執事のロッテンマイヤーさんと家庭教師の方がいました。一生懸命ハイジに文字を教えようとするがいっこうに身につかない。ところがある晩、クララのおばあちゃんがやってきて、夜寝るときにハイジに読み聞かせをしました。その本の中身がアルプスの山々の様子とか羊飼いの少年のこととか、そういったことが書いてありました。ハイジはそこに関心を持って、今度は自分から勉強をしていつの間にか本を読めるようになったということです。やはり何かこう興味・関心を持たせるような、子どもの持っているものを、うまく我々大人が、あるいは家庭が気付いて、その子の関心を伸ばしてあげる、そういう親の関わりというところがものすごく大事だなと、今も大人の本を読む姿を見せるというお話もありましたが、大人から何か子どもに、まず我が子を見てその子の持ち味をうまく引き出してあげる。またもう一方で行政側・学校側は子どもが手を伸ばせばそういう本が届くような、そういう環境づくりをこれからもやっていくと、家庭と行政がこれからも連携していかなければならないなと感じました。

市長

　ありがとうございました。今のさかなクンの話とアルプスの少女ハイジの話はいい話ですね。そういう意味では子どものきっかけみたいのを大人が見逃さないで、励ましてやって大きくしてあげるみたいなことができるといいんだろうな、ということをお話を聞きながら改めて思いました。最後にまた、桑山さんと舘野さんに伺いたいのですが、教育委員の皆さんがおっしゃつているように、すごく足利の宝といっていい取り組みだなとずっと思っています。毎年のコメントコンクールで読ませてもらうのを非常に楽しみにしているのですが、お二人がやってこられて、今後の展開ですが、一つ壁にぶつかっているようなイメージですか、それとも、もっともっと伸ばせる、広げられるといったイメージですか、その辺のことをお二人から聞きしたいと思います。

舘野足利市小中学校ＰＴＡ連合会会長

壁にぶつかっているという、そういう感覚は、私はないのですが、先ほども今後こんな事をという話をさせていただいた中で、もちろん大前提にあるのは「うちどく」という活動、後はそこに対してのアプローチの持って行き方というか、様々の方面から方法を変えてやっていくことで、まだ伸びしろはあるのではないかなと思ってます。中でもこの「うちどく」という活動が県内で見ると、足利はすごく先進的らしいですね。県の連合会でもこの話をすることがあるのですが、すると「足利ってそんなことやってるんだ、すごいね」という意見を下さる役員が結構いまして、そういう評価をいただいているこの活動ですので、子どもたちが先ほど多くの方から出ている漫画も確かにいいと思うんですね。漫画でも結局活字になりますし、その映画にはないテレビで見る漫画にはない、自分で想像していく状況っていうんですかね、そして文字を読んで表現力だったり、そういうのももちろん養えると思いますし、漫画がいけないというわけではなくて、もう一つの本として漫画も小説も様々な本を積極的に読んでもらえれば、もっともっと広がっていくかなとも感じています。また、やっぱりきっかけ作りが大事だと思います。例えば図書館の中ではなくて、学校の図書室の中ではなくて、例えば入り口の所に本を並べたりというふうにすると、もっと身近なものになると思います。この話はいろんなところで話をしているので、話が重複してしまうかもしれませんが、私は絵本が本当にいいなと思っています。本屋さんに行った時に、私は雑誌を買いに行ったのですが、入り口に入ったところに絵本が並んでいました。その絵本に一匹のウサギが載っていたのですが、それがかわいくて手に取って１０分ぐらい読んでしまったのですが、久々にこういう本を読んだと思いました。これもきっかけだと思うんですね。目につくところにそういう本があったという、それがきっかけなので、そういう事をやっていくと、まだまだたくさん出来ることがあるんじゃないのかなと私は感じています。

桑山うちどく推進委員会委員長

先ほど教育長からお話があった、「うちどく」をしない理由のところで、そもそも本や読書に興味がないという回答が非常に多かったですね。照本委員もおっしゃっていましたが、スマホとかゲームとか他に魅力的な選択肢がある中で、その土俵にすら本や読書は乗っていない子が多い。子どもだけでなく保護者も多い。そこを何とかしないと、先ほど不読率が出ていましてが、そこが改善されないのではないかなと思っています。まったく興味のない子どもたちや保護者にどうやって本や読書に興味を持ってもらえるかというのが非常に難しいなと思ってます。ビブリオバトルの出張講座みたいな感じで、我々も根強い取り組みをしなくてはいけないし、「うちどく」への一番の近道は、やっぱり

学校図書館の整備だと思います。学校図書館が魅力的で家にいっぱい本を借りて持ち帰って、持ち帰ったら子どもの読書力も増えるというので、そういった学校図書館の整備支援も併せてしていかなければいけないという部分と、先ほどの読書習慣を定着させる環境づくりという面で、例えば市立図書館さんと連携して何かできないかなと思っています。私が参考にした三郷市さんではやっぱり中学生になると部活等で忙しく本は読まない、不読率も高い、それをどうやって改善するかというと、三郷市の市立図書館が中学生の読みそうな本を全中学校の全クラスに１年間３０冊貸し出しをしているんですね。図書館に行かなくてもいつでも教室で本を読めるような中学生の環境ができているんです。読書習慣を定着させる面ではそういった協力も少しは得られたらなと思っています。

市長

先進的な取り組みであることは間違いないことであり、今、桑山さんがおっしゃったけど、不読率が残念ながら県と比べても小学５年生で 10 ポイント、中学２年生でも 10 ポイント、こういう数字を見るとまだまだいろんな余地が取り組む余地があると同時に短期成果主義に振り回されないで、粘り強く、継続は力なりというのは正にこうゆうことだと思っていまして、そういう意味では是非お願いしたいのは、Ｐ連の中でも縦の継承というのですかね、人が代わってしまい熱い人がいなくなってしまったら、この「うちどく」が先細ってしまったみたいなことが一番よくないと思います。そういう意味では横に広げると同時に、皆さん方が縦で「うちどく」に対する情熱が続いていくようにＰ連の中でも皆さんで励まし合って取り組みを息長く続けていただきたいと思います。そうすれが必ず数字は後からついてくるものだと思っていますので、是非その辺は我々ももちろん、教育委員会としてもお手伝いできることはできるだけしたいし、そんな形で励まし合ってやっていけたらなと思いますので、また折に触れて情報交換と接点を持ってやらせてもらえればと思っています。
ちょうど時間ですので、以上で終わりにしたいと思います。

事務局

その他は特にないので、これで令和元年度の第２回総合教育会議を終了する。

〇閉会　　午前１１時２０分